

15 明治9年7月25日 菊池長閑

第七号七月廿五日

五月六日附第四号六月十二日河上氏日数三十九日ニ而達速なる此度ヲ第一トス達不相
變勤学之由何寄大慶於此許も同然なり其地梅桜之花樹無之由地
味ニ不応な為か若くハ強而不植か福沢勇吉(フクザキ)之著述十二月帖ニ桜
ハ花ハ小サくして見処なけれとも実ハ大く砂糖漬なと有之様ニ
記候へ共寒帯之地を除之外梅桜如きハ何方にも可有之と存候処
思之外也然し草花にハ珍ら敷もの可有之候当時暑幾度ニ候哉此
許ハ去ル十九日土用入に成別而強く午前ニ而ハ八十六七度余処
ハ九十度之処も有之追々書通ヲ以考ふれハ日本ハ余程候も後
れ候昼夜ハ反対すれハ日本之日永ニハ其地長夜又其地之短日ハ
日本之短夜則当節之如き欵ニ被考候地球ハ日々施転すなから又
太陽を施転するとのよしなれハ天反対ニハ有問敷首迄取粉不承
居候閑暇之節取調送り可給則太陽曆四節ハ別紙調差越候間相違
之処ハ下えても取調可申候

避暑旁ニ里斗田舎へ移住之由地名并番号も違候半ニ其事不申越
ハ当分之事ニ可有之哉

信方君御同居申上候由今二三ヶ月も通候ハ、独離し止るハ御当
人之御為ニハ可宜候得共先便も申入候通橋場様ニ而は専ら御頼
ニ思召候処一ヶ年も不立ニ手離しとハちと無情之様と被存候然

し飽迄御附添申上万事従前之如く御世話申上而ハ御修業之為ニ
ハ却而不可然事も可有之日本人同居を不本意ヲ以てする事ニ而
は橋場様へ対恐入候右等ハ熟考之上ニ可有之候へとも例之老婆
心ヲ以心付之まゝ申入候不悪推察可有之候於くの義ハ其後煩ヶ
間敷事なし只今以頭痛之気味不絶手当不致とても格別眼立ニハ
無之候得とも当節三田杏屋を頼下劑之手当相致置候誰之診察ニ
も早俄取らずと申事緩ニ療養可致と存候唯夫のミニ而機織等致
居候当年ハ養蚕大当り五分種半枚ニ而押付盛上五斗二升当年程
石取ある事はまてなし是ハ福種之最上と申事故ニ可有之候昨今
糸ハお磯綿ハおくのニ為任置候

去月六日聖上御着輦折悪前々日ハ雨天続ニ而以之外道路悪敷深
泥既下駄之桁と衝か如く夕刻ハ晴上り翌七日ニハ女□エ行幸産
馬軍馬獅子踊山岸産也サンサ踊山岸産也又仁王学校試験場呉服丁之機業
場も叡譚也菊池之行在所ハ叡慮ニ叶たるよし同七日夜ハ庭上へ
数十之丸提灯を数燈泉水へ映時して大形美事ならん右等之為か
夜二時過御寝所ニ被為入候よし八日御発輦之節ハ小学生徒上田
茶や先に於て御見送申上大凡千五百人余なり引取にハ各校之旗
を立生徒二列ニ立足並揃て引く上田組丁長しと雖とも生徒余り
候是ハ如何にも見物也学校左之通

第一仁王学校元修文所

第二盛岡上小路角元石原御邸

第三鍛冶丁同丁

第四中野祇陀寺

第五長町同丁

第六志家八幡丁奇妙寺

第七山岸同丁

第八厨川夕顔頼向新田町

第九仙北町同丁裏青松寺

右之内第一二八四五百人もあるへし第三八三四百以下ハ少人数也志家ハ女教師ニ而生徒も女小児計教師生徒も皆袴を着たり余ハ新聞ニ語略シ

お波も去ル十七日ニ宮古へ立遣候暑中如何と案事候処存外違者ニ而廿日昼十時頃ニ鍛ヶ崎へ着之由右者御還幸之節ハ宮古へ御碇泊之御模様有之宅命も可立寄由婚ハ迎も不相成共為逢申度旨本宿も兼而申来ニ付而也

藤田も卒業ニ而去月廿一日帰県然るニ当県ニ而ハ採用ニ不成ニ付松前へ被雇来月ハ出立候様子此度之試験之内ニ而ハ第一等之様子ニ而評判宜候当県ニ而不用他ニ遣シハ甚残念也惣而当県学校之世話向不厚哉ニ相聞存候

今度開成場ハ生徒米國へ洋行之趣河上氏より案内有之兼而注文ニ付水晶之ホタン一條治士迄調方并送方共頼遣候処同人所持ニ付可差送旨申来其儘申受も如何致候得共右は申分ニ随ひ夫々准候挨拶候心得ニ候間幸便次第同人ハ可差送右兼而案内致置候又兼而注文ニ而鍵屋へ面倒為致候野紙類并団扇等当二月出帆之博覧会懸へ頼入候哉ニ候右は未た受取不申哉

当年暑氣随分緩くなし去ル六日己来雨一切無之蒔物不延大根ハ土用前後ニ蒔物なると畑ハ皆灰之如クニ而畦作る事不成何方までも尔今蒔兼居候類ニ好雨を祈候其地ハ如何なるものや御巡幸引統十三日ニ五位様御発駕十五日成姫様御着黒沢尻迄御見送其序ニ成様之御達もいたし旁ニ而此度ハ返事殊之外後れ候以上

武夫殿

長閑

明治九年曆

二月四日 立春 日出午前六時四十九分 日入午後五時十一分

三月廿日 春分 日出午前六時 日入午後六時

六月廿一日 夏至 日出午前四時四十七分 日入午後七時十三分

此夏至ヲ以永日短夜之極トス

九月廿三日 秋分之日之出入春分ト同シ

十二月廿一日 冬至 日出午前七時十三分 日入午後四時四十七分

此冬至ヲ以短日長夜之極トス

右之通取調閑暇之節相違之処書記可申

久平ハ之手簡無封ニ而被頼候間此度差遣候同人も大仕上ケと見得着丁長屋調三階之土蔵京東風ニ建候鉄具等ハ皆東京ハ仕入候よし

御巡幸ニ付県庁并扱処普請ニ相成写真いたし候間差越申候菊池之行在所も一枚差越候也

藤田より之一封是又差越也

(同封) 7月23日 根子久平

第七月廿三日発

菊池様

根子久平 ㊦

若旦那様 写真ヲ拝シテ後謹書

御機嫌能被為入恐悦至極ニ存上ケ升過日加賀野御屋敷イ久シ振

りニテ上り升タラ皆々様御揃デ御機嫌能御凌キ被遊目出度存上
升其節ソバキリ御馳走頂戴五字カンホト色々御咄シヲ伺イ。ア
ナタ様ノ写真ヲ拝シ御目ニカガッタヨウニ大慶ニ存シ升私も皆
々様ノ御引立ニテ今タ東京上下太物小間物唐物類ノ仕入渡世引
キツヂギ難有仕合ニ御座り升当春肴町中ホドノ間口六間家屋敷
ヲ求メ当時三間ニ六間ノ三階土蔵ヲ造リテヲリ升盛岡ニハ珍ラ
シイ蔵ダト旦那様ニモヲホメニナリ升タ追々見世モ開キタイト
存升。御巡幸ノタメカ盛岡モ家普請ナトも氣ヲツケ。タイソウ
ニ開ケ升折角アナタ様モ御シンボウ被遊御煩イデモナイヨウニ
御用心遊バセ。マダ御顔ヲ拝シ升御免アソバセ

(封筒裏)

「亞米利加国、ポストン府

ホートウイン・ストリート

二十二番地

菊池 武 夫 殿

「 要用書平安 〱

(封筒裏)

「日本陸中国岩手県盛岡

第一大区五小区加賀野

八十六番

菊池 長 閑 〱